

## 古英語の本文批評と *Beowulf* (14)

網 代 敦

前号では Görlach (1999) から Fulk (2007b) までの *Beowulf* の本文批評の論争史を年代順に追った。今号では最終段階として、Shippey (2009) から Neidorf (2017) までの主張の展開内容を、前号に倣って conservative (C)、interventionist (I)、中立の立場 (-) を示しつつまとめることにする。

### 2009: T. A. Shippey (-)

*Beowulf* の校訂本は 1922 年に Klaeber による第 1 版が、その後、改訂を経て 1950 年に第 3 版が刊行されて以来、他の校訂本を凌いでこの版が *Beowulf* テクストの標準版の位置を占めてきた。その理由は、従来の *Beowulf* 学を網羅的に収録、集大成したことと、比類のないグロッサリの徹底さにあった。この第 3 版 (1950) は第 2 版 (1928) でなされた 34 頁の補遺追加 (1920-27 のビブリオグラフィーと本文註ほか) と、第 3 版 (1941) でなされた 18 ページの補遺追加 (1933-39 のビブリオグラフィーと本文註ほか) を合体収録し、そして 1950 年の新たな刊行の折に、9 ページの第 2 補遺 (1942-48 のビブリオグラフィーと本文註ほか) が追加されたものとなっている。しかしながら、標準版といえども第 3 版 (1950) が世に出て以来、かなりの年月が経過し、その間の *Beowulf* 研究は多岐に亘って著しい深化を遂げている。このため、*Beowulf* の大幅な改訂新版が求められてきた。それを受け、Fulk, Bjork, Niles の 3 人の校訂者による *Klaeber's Beowulf* (第

4版、2008)<sup>306</sup>が刊行された。Shippey は本論文<sup>307</sup>でこれまでの研究に言及しつつ、この第4版に書評を与えながら、本版の3人組（‘a Triumvirate’）の校訂者による成果を明らかにすることを目的としている。以下、彼の論考を追ってみよう。

20世紀初期以前の *Beowulf* 学はドイツ人によって独占され、詩本文から異教ゲルマン的、あるいは神話的な要素、言い換えれば “völkisch form” (p. 363) を抽出し、ナショナリスティックな立場から詩を構築しようとする姿勢を強く示していた。そのような折に現れたのが、ドイツ人であるが国外在住者の Klaeber による *Beowulf* 初版 (1922) であった。これ以降、第3版までを通し Klaeber はこれらのナショナリスティックな見解を否定し、“Christian coloring” や古典基準であるラテン、特に “Virgilian influence” を強調した。(p. 363) しかしながら、今日に至る間に、Klaeber が予測も認識もでき得なかった様々な見解が提示されてきたこともあり、それが第4版への着手につながった訳である。改訂の方針は、第3版 (1950) のまだ有用できる多くの事柄と全体の骨子を残しつつ、“to refine and supplement Klaeber’s work rather than to replace his aims and methods with our own” ということにし、同時に、このテキストの使用対象者を文学はもちろんのこと、“language, history, folklore, material culture, and ... cultural studies” を研究する者に幅広く設定している。(Klaeber’s *Beowulf*, 2008, p. clxxxix) ここで Shippey が捉えた第4版における Introduction 中に見られる新たな視点として、本文の捉え方に関わる部分のみを簡単に指摘しておこう。

(1) 「写本」に関する記述の増幅。特に Kiernan (1981: rev. 1996)

<sup>306</sup> R.D. Fulk, Robert E. Bjork, and John D. Niles (eds.), *Klaeber’s Beowulf and The Fight at Finnsburg*. 4th edition (Toronto: University of Toronto Press, 2008).

<sup>307</sup> Review Article, ‘Klaeber’s *Beowulf* Eighty Years On: A Triumph for a Triumvirate.’ *Journal of English and Germanic Philology* 108: 360-76.

による *Beowulf* 写本に関してと、Thorkelin A & B の転写本がどのように作成されたかに関する研究に十分な重きが置かれている。(p. 366)

- (2) Klaeber (1950) と他の校訂者が、幾つかひどく不鮮明な半行があると見なしてきたものは、実際のところ誤写による重複語が消された跡であったことを認めている。(p. 367)
- (3) 判読不可に相当する 2229 行を繰り上げて、全総行数を 3181 行とする。(p. 367)
- (4) “Meter and Alliteration” の記述を充実させ、本文考察における韻律的配慮が強調されている。(pp. 367-68)
- (5) 本文に関して、アングロサクソンの写字生の判断よりも自分たちの判断を優先させている。例えば、写字生にとっても、校訂者にとっても一貫して難しい取り扱いを強いられる固有名詞の扱いにおいては、本校訂者の独自の判断を提示している。(p. 372)
- (6) 補遺 C に設けられた “Textual Criticism” (pp. 321-36) は、Klaeber (1950) のそれに相当する部分よりも 2 倍の長さに拡大され、最新のものとなっている。(p. 374)

特に Shippey は本校訂本における本文批評の取り扱いにおいて、「韻律」と「頭韻」への言及がよく見られることを指摘している。文法・意味・韻律の不備を、この両者の観点から修正したり、上記 (6) の項目内の細項目 “Grammatical Observations” で、例えばどの異形が採用されるべきかを決定する際、韻律がその決め手として用いられたりすることなどである。現存する唯一の写本本文の正確性を訴え、頭韻などの観点からの修正を認めない Kiernan の主張にも拘らず、写本を “an authorial copy” とはしない本校訂者の姿勢を浮き彫りにしている。(p. 375) 保守的校訂が現在主流をなしている中で、Fulk (1997, 2003, 2005, 2007a, 2007b) を中心に韻律と頭韻という確率性を根拠とする

修正派の台頭を、ここに見ることができる。

### 2013: L. Neidorf (I)

*Beowulf*の本文を校訂する際によく問題とされる点は、固有名詞の取り扱いにある。本文の読みの上で、固有名詞にとるべきか、あるいは普通名詞にとるべきか、読みにおける揺れが生じているからである。その揺れに関与しているのは、写字生である。Neidorfは本考察<sup>308</sup>において、次のような解釈を施している。写字生は固有名詞を誤読し、語形が類似した普通名詞に書き直してしまう場合がある。その誤りの要因はどこにあるのかを探り、*Beowulf*の制作年代と編纂との関りを考究する。結論を先に述べると、写字生は*Beowulf*を構成する英雄伝説の諸伝統に通じておらず、多々見られるこのような誤りの存在が示すところは、現存する*Beowulf*写本は数世紀前に作成された原作を転写したものであり、原作品と同時代のものではないということである。(p. 249)

Neidorfは論展開に先立ち、*Beowulf*写本に関し古書体学の立場から考察されたこれまでの論を次のように概観している。その内の代表的な3人の論を改めて簡単にまとめておこう。Kiernan (1981: rev. 1996)は、本文に見られる削除、修正、パリンプセストと見なされるフォリオ 179rに注目して、写字生が知性を持ってそれらに深く関わったということ、また Scribe Bが“quasi-authorial status”を示し得ることを主張した。それにより、写本と詩の制作年代を11世紀前半と捉えている。但し、これらの提示根拠は希薄とされている。(p. 249)次にLapidge (2000)<sup>309</sup>は、写字生の誤りは本文の文字上の混同 (a/u, r/n,

<sup>308</sup> ‘Scribal errors of proper names in the *Beowulf* manuscript’, *Anglo-Saxon England* 42. Ed. by Simon Keynes et al. (Cambridge: Cambridge University, 2013), 249-69.

<sup>309</sup> ‘The Archetype of *Beowulf*’, *Anglo-Saxon England* 29. Ed. by Simon Keynes et al. (Cambridge: Cambridge University, 2000), 5-41.

p/p, c/t, d/ð) に起因し、そのことは詩の制作年代かつ伝達の歴史に重要な関りを持っているとする。ほぼ 65 パーセントのこれらの文字の混同から想定して、*Beowulf* は本来 750 年以前にアングロサクソンの小文字体で書かれたとする。(pp. 249-50) さらに Sisam (1946: 1953) は、写字生は、461b の *Wedera* を *gara* ('of spears') とし、1261b の *Cain* を *camp* ('battle') とし、1960b の *Eomaer* を *geomor* ('sad') と誤記していることを指摘しながら、古英詩の写本は信頼性に欠ける面があり、修正を施す必要性を主張している。(pp. 250-51) この中で Neidorf は、特に写本の信頼性を主張した Kiernan (1981: rev. 1996) の考えに対し、次のような見解を与えている。超保守主義の校訂を採用した Kiernan は、上記 Sisam の指摘を否定し写本の読みを正当化している。しかしながら、Kiernan の校訂法は韻律的、言語的、文脈的確率からの、より大きな複合的視点に基づくものではないと断定する。それにより Kiernan は、原詩は写本制作年代と同一であるという自分自身の仮説に基づいていると指摘する。Klaeber 第 4 版では Kiernan のこのような読みは拒否されている。(p. 251)

以上のような写字生に関わる考察を見た後で、Neidorf は *Beowulf* の写本にしばしば現れる固有名詞に関わる写字生の誤りの包括的な研究は、これまでなされてこなかったことを指摘する。(p. 250) Neidorf の目的は、固有名詞に関し写字生による誤り・例外・修正による様々な語形を検討し、写字生の仕事具合 ("engagement") と意識度 ("awareness") が示唆するところを探り、*Beowulf* の制作年代と校訂に関する点を検討しようとするものである。(p. 251) 写字生が固有名詞を度々読み間違えるという事実は、次の点を示しているものと Neidorf は考える。1 つは、写字生は *Beowulf* を構成する英雄伝説上の伝統を知らなかったということ、もう 1 つはこれらの伝統は写本が転写される頃 (c. 1001-10) までには、あるいは、それ以前に最早広く流布されなくなってしまう点である。その結果、写字生が詩の内容を熟知していないことから、現存する写本は数百年前の原

詩を転写したものである (pp. 251-52) とし、Kiernan 説を否定する。そしてここで、Neidorf は写字生が固有名詞の取り扱いに困難を示した3つの現象を挙げている。それらは、(1) 固有名詞についての混同、あるいは固有名詞が当然そこに存在すべきことの誤認、(2) 写字生の知識不足によるものではなく、単なる不注意や一般的な機械的間違い、(3) 写字生自身による名前の変更・修正である。(p. 252) 以下、これら3点について、Neidorf の論点を集約しておこう。

#### (1) について

ウェストサクソンの系図では、Scyld の息子は *Beow* として挙げられているので、写本に現れる *Beowulf... Scyldes eafera* (18-19a) と *Beowulf Scyldinga* (53a) は写字生の混同による間違いである。写字生は系図上の関係を知らなかったということである。但し、ここで問題となるのは、この誤りは最終の写字生の手によるものなのか、それともそれ以前の写字生によるものなのかの判断はできない。(p. 253) 次に、本来は人名であったものが形容詞に変更されてしまった例で、*Eomer* (1960) を *geomor* ('sad') としたことである。*Eomer* がアングル族の王 *Offa* の息子であることが写字生には知られていなかったと指摘する。*Beowulf* の写本では古英語の固有名詞は2要素に分割されて記述されることが多い。但し、これには規則性があり、韻律上の要素に則っているとされる。意味のない、韻律上の情報を持たない語分割は、写字生側の無理解に起因するとみる。例えば、「フリジアの戦場にて」を意味する *in Freswæle* (1070a) を *infr es wæle* と分割してしまうような場合である。(p. 254)

#### (2) について

1つは詩の統語法を写字生が誤解したことにより、固有名詞における屈折語尾形を取り違えてしまった場合で、例えば、*fram Sigemundes* (875b) となるべきところを、*fram sige munde* としたことがその一例である。写字生は、前置詞 *fram* の目的語として与格形 *sige munde* を

与えたが、ここは属格形の *Sigemundes* は 876a の与格形である *ellendædum* (‘feasts of courage’) を修飾すべきところである。(p. 256) また、Neidorf が “mechanical transposition” (p. 257) と呼んでいるもので、*r* と *d* に見られる音位転換の例から生じた誤解がある。それは 2186a の (*dryhten*) *Wedera* (‘the lord of the Weders’) を (*dryhten*) *wereda* (‘the lord of hosts’) とした箇所に見られる。どちらも文脈上から固有名詞が求められるところであるが、写字生はその背景を知らなかったということが指摘されよう。

### (3) について

写字生は転写した本文に、数々の修正と変更を行っていることが判明している。Kiernan (1981: rev. 1996) は、「彼らの ‘proofreading’ は徹底的であったと思われる。(p. 195)」と述べている。しかし Neidorf は、写字生は固有名詞の取り扱いに困惑していたこと、‘proofreading’ の後にも固有名詞において間違いが残されていることを提示し、それ故 Kiernan の主張には疑義を抱いている。これにより、*Beowulf* の写本の制作年代に関しても、Kiernan の説には異論を唱えている。

これらの考察から、Neidorf は *Beowulf* 本文の伝達ということと、その伝達された本文をどのように校訂するかについての結論 (pp. 264–68) を導き出している。アングロサクソン・イングランドに英雄伝説が広まり、その後伝播が途絶えて行った事実から判断して、*Beowulf* の制作年代は 7 世紀あるいは 8 世紀であること、近年では具体的に 675 年と 750 年の間とするのが一番有力視されていることを先ず指摘する。このことから、原作品が後の 11 世紀の現存する写本に伝達される過程で、本文にどのようなことが生じたかが焦点となる。Neidorf は、本文は多くの “cosmetic work” (p. 264) を受けているとし、以下のような具体的項目を挙げている。前置詞 *to* の後の無屈折の不定詞が屈折化されていること、*Unferð* の名前に補綴りの *h* が付加されていること (*Hunferð*)、古綴りが新たな綴りに改められている

こと、アングリア方言形が後期ウェストサクソン形に変更されていること、半行が思いがけず省略されていること、fitt 番号が付されていること、パンクチュエーションが変更されていることなどである。(p. 264) 但し、伝達された本文は、韻律上保守的特徴をとどめていることから、後々の写字生が本文伝達の際に *Beowulf* を実質的に改作してしまうことはなく、かなり機械的に転写したことを認めている。それによって固有名詞の間違いや、文字の混同によって無意味な読みを生じさせているのは、写字生が十分に本文を理解していたとは思えないことを示しているとする。(p. 265) というのは、*Beowulf* は、5, 6 世紀に隆盛を極めた英雄や民族に関する詩で、アングロサクソン後期には知られていない伝統を映し出している。そのため、写字生はこれらのことを認識しておらず、また間違いを修正する専門的な知識も欠如しているため、‘exemplar’ そのままを転写せざるを得なかったとする。(p. 266) この点は *Beowulf* の校訂者による本文介入への正当性を主張する根拠となる。そして、固有名詞を写字生が間違えていることは、Stanley (1985 for 1984)<sup>310</sup> の見解の根拠が論理的ではないことを示すものであると Neidorf は指摘している。(p. 267)

Neidorf は最後に、これまでの主導的な立場であった保守的校訂主義の姿勢から、積極的な本文介入への賛同を表明している。<sup>311</sup> そしてここでの見解は、次に取り扱う著書の中でさらに大きく展開されている。

---

<sup>310</sup> Stanley の見解については、拙論「古英語の本文批評と *Beowulf* (9)」大東文化大学英米文学論叢第 45 号 (2014), pp.72-6 を参照。

<sup>311</sup> “Textual conservatism has dominated Old English studies, yet Kenneth Sisam and Michael Lapidge have offered strong defences of the liberal position, encouraging freer use of emendation and limited faith in scribes.” (Neidorf, 2013, p.268).



**2017: L. Neidorf (I)**

Neidorf の本書<sup>312</sup> は、*Beowulf* の本文が写字生によりどのように伝達されてきたか、それを「言語史」、「文化的変化」、「写字生の行為」という大きな文脈から明らかにしようとしたものである。このことは大いに本文批評と関わる問題を孕んでいる。Preface (xiii-xvi) において、本書の目的の大枠が述べられているので、まず初めにその点を提示しておこう。

700 年頃に制作された *Beowulf* 原本と、1000 年以降に作成された唯一の写本との 300 年以上の間に、本文にどのようなことが生じたか、いろいろな問いが発せられる。例えば、

- (1) 本文が *Beowulf* 詩人の手を離れた時、本文は本来持っていた「語彙的・韻律的特徴」をそのまま保持し続けているのか。
- (2) 写字生たちは、本文伝達（‘transmission’）の間に、すっかり本文を改作（‘recompose’）してしまったのか。
- (3) (2) と関わる点でもあるが、*Beowulf* の原作者は ‘unitary’ か ‘composite’ か。

などである。(xiii) Neidorf のこれらに対する見解は、(1) については、詩の初めから最後まで “lexical and metrical archaisms” (xiii) が見出されるとし、(2) に関しては否定的である。但し、本文伝達の間に本文に何も生じなかったということではない。Neidorf は 300 以上の写字生の間違いが本文に入り込んでいることを認めている。これらの間違いは解釈上の深刻な妨げとまでにはならないが、このような表層の本文の改悪を取り除くことが、*Beowulf* の校訂者のなすべきことであるとする。<sup>313</sup> (3) については、多くの “subtle linguistic regularities”

<sup>312</sup> *The Transmission of Beowulf* (Ithaca and London: Cornell University Press, 2017).

<sup>313</sup> “The accumulated errors thus present no grave impediment to our understanding,

(xiii) が詩に行き渡っていて、他の古英語作品と区別され得る点が認められるところから、“composite authority or scribal recomposition” (xiv) という仮説には強い疑念を投げかけている。中世の作品は「個」を主張せず、写字生を初めとして多くの手が関わって ‘recompose’ されたとする、近年の B. J. Muir (2006)<sup>314</sup> などの考えに対して強い異を唱えたものとされよう。伝達された本文に見られる写字生の誤りの原因は、伝達される 300 年の間にイングランドで起こった言語的・文化的変化に起因する。そのことが後期の写字生の初期アングロサクソン期の言語文化への無知を引き起こし、本文に影響がもたらされていると解釈する。(xiv) 写字生の目的は、先行する写本コピーの綴りを、自分の今現在のものに同化させることであり、古英詩自体を「理解する」、「解釈する」、「作り変える」ことではなかったというのが、Neidorf の主張である。(xv)

本書全体を詳しく追うことはできないので、本趣旨の根幹をなす第 1 章 (Introduction) を中心に見ていくことにする。1. The Duration of Transmission (pp. 1-10) を取り扱ったところでは、先ず、*Beowulf* の現写本は伝達されてきた本文に行き亘って見られる転写上の誤りがあるところから、この原写本は “a copy of a copy” (p. 1, § 1) であるとする。続いて、2 人の写字生の行為を理解することが、*Beowulf* の本文批評には欠かせない点であると述べる。(p. 2, § 2) 次に制作年代のことが触れられている。7 世紀から 11 世紀に及ぶ緒論が出されているが、現在は Fulk (1992)<sup>315</sup> による古英詩の韻律論が大きな牽引力

---

but form a thin veneer that can be removed. Indeed, editors of *Beowulf* do remove this layer of superficial corruption, relegating it to the apparatus criticus and printing emended forms in their texts.” (Neidorf, 2017, xiv).

<sup>314</sup> Bernard J. Muir, ‘Issues for Editors of Anglo-Saxon Poetry in Manuscripts Form’, *Inside Old English: Essays in Honour of Bruce Mitchell*. Ed. by John Walmsley (Oxford: Blackwell, 2006), 181-202.

<sup>315</sup> R.D. Fulk, *A History of Old English Meter*. (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1992).

となって685年から725年の間という年代内に制限される傾向が強い。いずれにしても700年頃制作されたという仮定は、‘lexical’, ‘semantic’, ‘onomastic’, ‘paleographical’の研究に基づいている。(pp. 2-3, § 3) *Beowulf*のような古英詩の韻律は非常に規則的である。(p. 3, § 4) こう指摘することにより本文の不規則な部分は写字生の誤りに起因し、本文批評上、積極的修正を是とする根拠としている。また改めて固有名詞学 (onomastics) の面にも注目を払っている。ゲルマンの伝説はアングロサクソン初期 (7, 8世紀) にはしばしば出回っていたが、9世紀になると次第に消えつつあった。9, 10世紀を迎えると、“the oral currency of Germanic legend” (p. 7, § 9) を実証し得る同時代の作品は見出せない。よって *Beowulf* 写本中の固有名詞の一連の ‘corruption’ は英雄伝説がかつてほど広く知られていなかった証左であり、2人の写字生もこれらの英雄や国民の名前を知らなかったと断定する。(p. 7, § 9) 古書体学の見地から判断すると、初期の転写本から後期のそれに筆写された時に混入したに違いないと思われる誤記が認められるとする。例えば a と u の混同で、*anhar* (357a) に対して *unhar* や、*wadu* (581a) に対して *wudu* が見られる。その他として、r/n, c/t, p/b, d/ð の混同は Neidorf (2013) でも指摘された通りである。(pp. 7-8, § 10) 伝達されたテキストは主として後期ウェストサクソン方言によるものだが、古い綴字形が混入している。これは写字生が誤解をしたことにより、綴りの “modernization” ができなかったことに起因する。(p. 8, § 11)

次に 2. The Detection of Scribal Error (pp. 10-18) を見てみよう。*Beowulf* がどのように伝達されてきたかということに関する様々な洞察は、写字生が誤解し本文の崩れ (‘corruption’) を生じさせてきた、その写本の読みの中から得られるとするのが、Neidorf の強い主張である。「*Beowulf* のテキストの歴史」のみならず、「言語の歴史」、「文化上の変化」、「写字生の行為」、そして「古語形であるアングリアン方言の詩が、アングロサクソン後期においてどの程度理解され得たの

か」を知る重要な手掛かりになるとする。(p. 10, § 14) こう指摘した後で、Neidorfは従来の本文批評の一見解に対し、再考察すべき提言を行っている。例えば、「詩人による原作品とそれを転写した写字生の作品とをそれぞれ同定することは不可能である」とした Pasternack (1995)<sup>316</sup>の見解に見られるように、古英詩に本文批評を持ち込むことは実りのない分野であるとする姿勢に対しては、“the methods and reasoning employed in *Beowulf* textual criticism” (p. 10, § 14) を十分に把握していない学者によく見られるものであると述べて反駁している。そして“editorial conservatism”は1世紀以上も古英語研究において浸透してきているが、“how scribal errors in the *Beowulf* manuscript can be deleted and emended” (p. 11, § 14) を詳細に明らかにする必要があると述べる。この批判は、Kiernanのような写本の超保守的な読みの姿勢に向けられている。文脈において何らかの意味が絞り出されるなら、修正を施さず写本の読みを保持しようとする“ad hoc reasoning” (p. 13, § 17) に対する警告である。その上で、Neidorfは写字生の行為をよく理解することが本文批評における必須の手段であるとする。(p. 17, § 23) 転写する際に写字生は、本来転写すべき語を、視覚上それに類似する語に崩してしまう傾向にある。その折、この傾向が本文の意味内容への無関心を示し、綴字を“modernize”しようとする要求とも相まって、多くの間違いを引き起こす要因となる。(p. 17, § 23) 写字生は文意と詩の形式上の特質を考慮せず、一語一語を基に転写する傾向を示す例も見出されることなどから、写字生の間違いを探知する基準として、「韻律」と「頭韻」に目を向ける必要性を強調する。(p. 18, § 23)

3. Meter and Alliteration (pp. 18-21) の項に見られる見解は、近年 Fulk (2003; 2005; 2007a; 2007b) が盛んに主張している姿勢と同調

---

<sup>316</sup> Carol B. Pasternack, *The Textuality of Old English Poetry* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), p.193.

するものである。即ち「本文批評に必須な点は、韻律と頭韻に則った確率性の高い客観的な基準に従う」ということである。詩の本文修正に反対する者で、韻律・頭韻の欠如部分は詩人が“artistic purposes”を意図してそのようにしたと主張<sup>317</sup>する者もいるが、Neidorfはこれを正しくないとする。というのは、本文の崩れが疑われるところでは語形と意味の欠陥がしばしば共起しているからである。(p. 19, § 25) アングロサクソンの詩人や、詩の聴衆が欠損する韻律や頭韻部分を“literary sophistication”と見なしていた根拠は見出せないとする。(p. 20, § 26) Neidorfの次の主張、“In the wars fought over textual criticism, meter is an impartial weapon: it undermines conservative efforts to defend corrupt readings as effectively as it constrains liberal efforts to bring about specious improvements of sense or style.” (p. 21, § 28) は校訂上の保守主義者の方針に大きな一石を投じることになるであろう。

続いて、4. Probabilistic Reasoning (pp. 22-25) においては、写本本文の崩れかどうかを判断し修正を加えるか否かの基準として、Neidorfは‘meter’, ‘orthography’, ‘phonology’, ‘morphology’, ‘syntax’, ‘dialectology’の総合的な取り扱いを強調する。(p. 24, § 32) そして Introduction の最後に、5. General Prefatory Remarks (pp. 25-29) を与えている。その要点をまとめると次のようになる。

§ 33—*Beowulf*における本文批評に対し、全体としての詩の原作版(“original version”)を再構成することは不可能であるので、実りがないという批判が浴びせられてきた。しかしながらこの見解には本文批評の実際目的に関する誤解が反映されている。*Beowulf*の現代の校訂者たちは、写本に見られる300以上の写字生の間違いを修正しているものの、それらが*Beowulf*そのものの“the pristine original”を生成することに結び付いているとは考えていない。近年の校訂本は、長さ

---

<sup>317</sup> 1例として、次の論考にその趣旨が見られる。John D. Niles, ‘Editing *Beowulf*: What Can Study of the Ballads Tell Us?’ *Oral Tradition* 9: 440-67.

が確定されない脱落部分の *verses* を補おうとはしないし、伝達された本文を古語形の綴りや方言綴りで書き換えることもない。校訂者の目的は、回復できる見込みのないものを何とか取り戻そうとすることではなく、反論の余地のない確率事項 (“probabilities”) — 上述の ‘meter’ など — が適用できる場合は、“authorial readings” を復元することである。*Beowulf* の校訂者の目的は失われたオリジナルの「部分的な再構成」をすることであって、写字生によってなされたダメージを単に減じることである。(p. 25)

§ 35—現在の本文批評学の傾向によると、*Beowulf* に見られる本文の崩れのことごとくは、現存する写本を筆写した最終の二人の写字生によるものであるとする。これらの写字生自らが多くの間違いを伝達された本文に導入した責任は疑い得ないが、一方で筆写している ‘exemplar’ の中にすでに存在していた間違いを無批判に再生していた可能性もある。本文批評家は、このどちらであるかということを決定的ことはできない。但し、こう考えるのが好ましいであろう。本文のある一定の崩れは、ある特定の写字生に見られる独特なやり方が要因で引き起こされたのではなく、「写字生一般の行為の産物」と見なす方が正確である。具体的には、正字上の規則性に固執した写字生が、機械的に、一語一語対応の方法で本文を複製し、韻律や意味には関心を払わなかったことで、本文の崩れが引き起こされたという訳である。(p. 27)

§ 36—詩が作成された年代—8 世紀 (アングリア方言) —と、それが受容されていく年代—11 世紀に至るまで (後期ウェストサクソン方言) —の間に介在する言語的、文化的変容は後期の写字生の本文理解に対し困難を生じさせ、写字生が間違いを起こす要因はそこにあると判断される。(p. 27)

§ 38—まとめとして、Neidorf は次のような言葉を与えている。“The extant manuscript is not a divine relic; it is the product of fallible human laborers. To treat the transmitted text as a set of immutable and inevitable

facts is to deny the material realities of medieval textual production.” (p. 28) これは、写本の保守的読みに固執した本文批評の姿勢に再考を促す言明となっている。

次に以下の章を簡単に見てみよう。第2章 (Language History) では、2人の保守主義者、Stanley と Kiernan に批判が向けられている。Stanley (1984) への批判は次の点である。*Beowulf* 本文には通時的、また方言上の変容によって引き起こされた写字生の間違いが認められる。8世紀の古英語と、11世紀の古英語とは異なるからである。古英語はその世紀の間変化を起こさないままであった “a homogeneous language” ではなかった。(p. 31, § 39) Stanley (1984) はこの点を考慮していないとする。Kiernan (1981) に対しては、*Beowulf* の詩が写本と同時代のものであるとするなら、伝達された本文の中に、言語変化の理由で生じた間違いが含まれるはずはないとの反論を提示している。(p. 33, § 40) 次に写本本文の統語面に目を移している。写本には統語における間違いが認められ、これにより、最終的な写字生は、“the continuous narrative of the poem” を把握していなかった証拠になるとし、本文修正の根拠を見出している。(p. 61, § 75) さらに校訂者の本文介入が是とされる論拠を、写字生による “trivialization” という点に注目した。これは「見慣れない語を自分がよく知っている語に変更してしまうこと」で、その際、文脈上の意味は考慮されることはない。写字生は後期古英語には精通していたが、古語形に関してはそうではなかった。これが間違いの引き金になって、“trivialization” の行為が起こされていると考えている。これから、Neidorf は次のような見解を持って、校訂者の本文介入を強く主張する。“An overview of the various manifestations of trivialization also conveys a strong impression of the poor condition of the transmitted text and the consequent necessity of editorial intervention.” (p. 62, § 76)

第3章 (Cultural Change) では、アングロサクソン前期と後期の間

における文化的変容により、それが写字生にどのような影響をもたらしたかを取り扱っている。*Beowulf* 詩人と詩人が対象とした初期の聴衆に知られていた英雄伝説の伝統は、詩を伝達した後期の写字生には明らかに知られていなかった。(p. 73, § 88) Neidorf はそこから生じる間違いの 1 項目として、固有名詞の取違いの例を挙げている。例えば、ウェストサクソンの系図を知らないが故の間違いとして、本来は *Beow* (18a) であるべきところを *Beowulf* と記述してしまったこと、さらには固有名詞と形容詞の取違いとして、文脈上 *Eomer* (‘Offa’s son’, 1960b) とすべきところを *geomor* (‘mournful’) にしてしまっていることなどが指摘されている。(p. 75, § 90)

続く第 4 章 (Scribal Behavior) においては、‘the lexemic theory’ というものを設定した。これは ‘exemplar’ 中の一連の書紀素 (grapheme) の中で、どれが語彙素であるかを決定する理論を指している。(p. 103, § 126) 具体的に言うと、「写字生は正しく語を認定した場合は、その語の外面上の独自点を変更し、その標準形である後期ウェストサクソン形に直して転写しようとするが、認定できなかった場合は、語形が似ている語に代えて伝達する傾向がある。但しその場合、明らかに文脈と合致しない。」という提示である。言い換えると、写字生は語形に多く捉われた傾向があるものの、文意には無関心であったということである。この ‘the lexeme theory’ から判断すると、写字生は必要とみれば、現存する本文内容までをも自由に改作し、その結果最終的に詩人と共著者となるといった Muir (2006) の論は、受け入れられないとする。(pp. 103-4, §§ 127-28) また同様に、同一作品が複数の写本に現存している古英詩において “textual variation” が見られるのは、写字生が転写作品を積極的に “shaping” することに関与していたという O’Keeffe (1990) の見解にも疑義を呈している。(p. 110, § 135) さらに、同一作品が複数存在し、その中に “variant readings” が生じる場合は、写字生が “the creative intervention” を行っ



た証拠と考えられるとした、Doane (1994)<sup>318</sup> と、その見解に近い立場をとり、伝統的な textual criticism を批判した Liuzza (1995)<sup>319</sup> に対しても懐疑的である。(pp. 110-11, § 136) 最終的に Neidorf は、設定したこの ‘the lexemic theory’ に基づいて、写字生は転写の際に「詩を読んだのではなく、語を読んだ」(p. 130, § 157) とし、“Scribes changed texts not as poets or performers, but as the inspectors and guardians of orthography.” (p. 132, § 160) という見解を提示している。

最後の第5章 (Conclusion) に触れよう。本書の大きな論点は、300年間に亘る本文伝達 (transmission) の際に写字生たちが “creative participants” (p. 133, § 161) として、どの程度本文に関りを持ったか否かということであった。もし写字生が原作に手を入れ詩人と一体化して創作に参加したとするなら、本文伝達の長い期間において異なる時代や異なる場所によって引き起こされる言語的、韻律的、文体的相違が本文の諸所に見られてもよいはずである。しかしながら Neidorf は、*Beowulf* には多くの言語上の規則性が浸透していることを認めている。但し、上述した ‘the lexeme theory’ に則り、この言語上の統一性を損なっている読みが突き止められた場合は、正しい読みを復活させる意義があるものと考えている。(p. 156, § 189) *Beowulf* における本文批評がどの点において妥当性を持ち得るかの判断を示したこと

<sup>318</sup> A.N. Doane, ‘The Ethnography of Scribal Writing and Anglo-Saxon Poetry: Scribes as Performer.’ *Oral Tradition* 9:420-39. “... the Anglo-Saxon scribe copying vernacular texts, and particularly vernacular poetic texts, is in many cases a special kind of speaking performer and, as such, has a status analogous to that of traditional performers of oral verbal art, .... In the course of doing this job, ... the scribe recreates the transmitted message thorough his own performance within the tradition.” (421-22)

<sup>319</sup> R.M. Liuzza, ‘On the Dating of *Beowulf*’, *Beowulf: Basic Readings*, ed. by P.S. Baker. (New York and London: Garland Publishing, 1995) 281-302. “... scribes were active participants in the process, mediating between the text and its readers, reconstituting the text in a performance on the manuscript page with sometimes scant regard for the precise reproduction of an authorial text;” (291)

になる。Hoops (1932)<sup>320</sup>の主張以降、韻律上欠陥があっても写字生が自身の基準で容認可能と判断したものであるので、修正する必要はないとされてきた。しかし写字生が専ら自分の基準で行ったことは、本文の正字法 (orthography) が受け入れられるか否かであって、韻律や頭韻に関してではない (p. 157, § 191) とし、Hoops らの見解には賛同していない。また、本文の崩れと疑われるものを修正するか保持するかという議論の際に、個々の写字生の転写における正確さや用心深さに関し考慮したものを、判断基準にのせる訳にはいかないとする。(p. 158, § 192)

Neidorf は、*Beowulf* の長い本文伝達の期間における「写字生の行為」

---

<sup>320</sup> Johannes Hoops, *Beowulfstudien*, (Heidelberg: C. Winter, 1932. Amsterdam: Swets & Zeitlinger N.V., 1967). “Bei den sonstigen Änderungen der Herausgeber spielen meist metrische Erwägungen eine wichtige Rolle. Es liegt mir fern, die Bedeutung metrischer Untersuchungen bestreiten zu wollen; sie sind ebenso nötig wie sprachliche. Aber ich halte es für bedenklich, in den meisten Fällen für unberechtigt, lediglich aus metrischen Rücksichten eine Textänderung vorzunehmen, wenn sie nicht durch andre Gründe gestützt wird. Es ist allerdings unbestreitbar, daß die metrischen Formen des überlieferten Textes in vielen Fällen ebenso wenig wie die sprachlichen Formen noch denen des Originaltextes des Dichters entsprechen. Aber ebenso wie man immer mehr davon abgekomen ist, den Originaltext sprachlich zu rekonstruieren, ebenso sollte man sich auch metrischer Rekonstruktionen des Urtextes enthalten. Wir müssen uns damit bescheiden, das hinzunehmen, was den beiden, im ganzen doch recht sirgfältig arbeitenden Schreibern zu Ende des 10. Jahrhs. sprachlich und metrisch normal oder zulässig erschien, und wir müssen uns darauf beschränken, wirkliche Fehler und Mißverständnisse zu beseitigen.” (p.9) (「校訂者たちがその他の点で (本文) 修正をする場合、大部分において韻律上の考慮が重要となる。韻律による分析の意義を否定しようなどというつもりはない。それは言語的な分析同様に必要なことである。しかしながら、他の要因により裏付けるものがないからと言って、単に韻律上だけの理由に依拠し本文修正を試みることは危険であり、大抵の場合不当であると見なされよう。伝承された本文の韻律形式は、言語形式と同様に多くの場合、詩人の手になる原文の両形式に一致していることが少ないのはもちろん明白である。そうではあるが、原文を言語的に再構成することを次第にやめるようになってきている。と同時に、原文を韻律的に再構成することも控えるべきであろう。総じて確かに几帳面な仕事をなしていた 10 世紀末の二人の写字生が、語学的にも韻律的にも標準である、あるいは容認され得る、と見なしたと思われるものを受け入れることで、良しとしなければならぬ。そして実際上の間違いと誤解を取り除くことだけに止めておかななくてはならない。)」

に注目した。その中で特に「本文の崩れの部分は、原詩の制作年代と現存する写本の年代の3世紀間に起こった数々の変化を雄弁に物語っている」(p. 162, § 197) とし、Kiernan, Niles, O’Keeffe, Doane, Liuzza, Pasternack らの考察に疑義を呈し、古英語の本文批評に新たな考え方を導入した。

これまで第1部(『論叢』Nos. 36-42)では「古英語作品の編集・校訂の歴史的概観」について、第2部(『論叢』Nos. 43-48)では「古英語作品の本文批評に関する諸議論」について、そして第3部(『論叢』Nos. 48-50)では「*Beowulf*の本文批評変遷」について、その研究史を辿ってきた。次号では、第2部と第3部を改めて振り返り、通時的に展開されてきた本文批評の対立する論のせめぎ合いを批評し、コメントを与えることを試みたい。

(次号につづく)